芸振

もくじ

ずいそう……1
第23回大分県芸術祭(グラビア)……2～3
第23回大分県芸術祭各賞受賞者……4
さざ波……5
加盟団体の活動……6
芸術文化基金海外派遣事業帰国報告……6
シリーズ会員通信②わたしは今……7
事務局だより……8

大分県芸術文化振興会議
発行人:挟間正年　編集人:後藤昭六
No.72　62・12

県民オペラ 20周年に当たって

大分県オペラ協会
会長　小長久子

県民オペラが発足して今年20周年を迎えた。11月28日、20年前にこのオペラで出発した「フィガロの結婚」を取りあげ大分県芸術祭閉幕に上演、無事終了した。

20年を振り返ってみると感慨無量という他はない。ここまでオペラを続けることができたのも県、市をはじめ御支援をいただいた県民の皆さまのお蔭である。又、39年に発足した大分県芸術文化振興会議、そして翌40年から開催されてきた大分県芸術祭が何よりもの推進力となって私たちを支えてくれた。

思えば42年に県内の大学・芸短大の先生方をはじめ音楽関係者に集まってもらい、県民によるオペラ上演の話を討議したが、はじめてのことだけに中々前に進まなかった。しかし大阪フィルハーモニー指揮者の朝比奈隆先生の「一歩踏み出せばそれだけ進む、1と0の差は無限に大きい」と云う言葉に励まされ、43年10月1日、県芸術祭の開幕にモーツアルトの名作「フィガロの結婚」を大分交響楽団との協演により、はじめて私たちの手で上演することができた。この成功に力を得てこれまで「椿姫」、「カバレリア・ルスチカーナ」、「蝶々夫人」、「カルメン」、「魔笛」、など多くの名作オペラに取り組み上演してきた。そして、48年には、大分の民話「吉四六昇天」を阪田寛夫台本、清水修作曲で創作、今はなき、立川清登さんを〝吉四六〟に迎えて大分文化会館で初演した。〝お爺さん〟役を当時の県民オペラ後援会長であった(故)長野正社長が引受けて熱演してくれたことは、今でも忘れられないことの一つである。その後県内・九州はもとより、皇太子殿下御一家をお迎えして、東京公演、大阪公演、中国武漢市・北京市公演など50回近くの上演をこのオペラで行ってきたが20年間を通じて〝革の根運動〟と称し、私たちは早くから地方を廻り「吉四六」をはじめその他で100回近くの上演をつづけてきた。

オペラは音楽・演劇・美術・文学・バレエなど多くの要素が総合された最高の舞台芸術である。上演のためにはそのエネルギーは勿論のこと想像以上の費用がかかるのが常識とされ、切符収入は総経費の3分の1、あとは外国では国や州や企業が応援していると云われる。わが国ではもともとそうした基盤のないところからオペラは出発し創られているのが実情である。県民オペラが大分合同新聞文化賞、ウィンナーワルトオペラ賞、音楽之友社賞、サントリー地域文化賞最優秀賞はじめ数々の県芸術祭賞を受賞できたのは、多くの困難を乗り越えオペラ運動が如何に地域に密着しているかを評価されたものと考える。59年7月大分県民オペラの呼びかけで結成された全日本地方オペラ協議会では毎年東京で行われる〝オペラコンサート〟に大分県東京事務所や県人会、〝一村一品〟の代表的な会社の支援や県出身の博報堂の社長磯部律男氏、後藤県民オペラ後援会長から毎年生花が贈られるのも全国オペラの関係者の間で話題になっている。これからも、20年を節目に、わが郷土大分のため頑張りたいと心を新たにしている今日このごろである。

閉幕公演「フィガロの結婚」のプログラムのカットから

グラビア

県芸術祭

開幕行事　「豊の国音頭」でフィナーレ　―森山幸吉と梅幸会―

地方開幕３年次の第23回大分県芸術祭は、去る10月１日、宇佐市のウサノピアで、梅幸会の「豊の国民謡の旅」をテーマにした民謡絵巻で華々しく開幕した。

今年の芸術祭は、この開幕行事を含め、４つの主催行事と８つの共催行事など合わせて123行事で、59年と並んで過去最多となった。

今年の特色は、市町村の文化祭いわゆる総合部門が47件とこれまでの最高を数えたことで、これまで以上に、すそ野の広がりを持ったことである。

また、中幕の県民演劇が15周年、閉幕の県民オペラが20周年を迎えるなど舞台芸術分野が一段と充実した年でもあった。

この23回芸術祭を主催行事を中心に写真でまとめてみた。

▲「吉四六」役の藤沢一男氏

中幕行事　話題を呼んだナウイ「吉四六」さん
―県民演劇制作協議会―

フィガロの結婚

▲閉幕行事　20年ぶりに上演された「フィガロの結婚」　―県民オペラ協会―

◀主催行事
第23回大分県美術展 日・洋・彫・工展風景
―県美術協会―

▲参加行事　にぎわった日出町総合文化祭（11月14・15日）

▲共催行事　県高校総合文化祭で見事なハーモニーを披露した大分上野丘高校の合唱部

第23回 大分県芸術祭賞等決まる

今年の芸術祭賞等を決める第23回大分県芸術祭主催者会議と同運営協議会が、去る12月7日、大分市で開かれ、芸術祭賞など個人7人と6団体が選ばれた。

なお、今回から奨励賞が新設された。

受賞者及び団体と功績概要は、次のとおり。

区分	受賞(団体・個人)	功績概要
芸術祭賞	日本民謡梅幸会	県芸術祭の地域での開幕公演「豊の国民謡の旅」を宇佐市で開催し成功させた実績は大きく、平素から民謡を通して郷土文化の育成・普及に努めている。開幕公演は、地元文化団体の賛助出演もあって地域に密着した文化活動とあわせて、県民文化の向上に大きく寄与した。
芸術祭賞	大分県民演劇制作協議会	昭和48年の「沈んだ島の物語」を上演以来、県下の演劇活動の中心として活躍、今回はその実績の上にたって15周年記念公演としてオリジナル作品「吉四六よUFOに乗れ！」を公演、充実した舞台でこの異色作品を紹介、演劇をとおして県民文化の向上に大きく寄与した。
芸術祭賞	大分県県民オペラ協会	県民オペラ協会は昭和43年に芸術祭開幕行事として「フィガロの結婚」を上演して以来、オリジナル作品「吉四六昇天」をはじめ数々の名作オペラに取り組み、今年はその原点に帰って「フィガロの結婚」を公演、華麗な舞台を紹介し観客に深い感動を与え県民文化の向上に大きく寄与した。
功労賞	疋田青峰（大分県番傘川柳連合会）	県芸術祭共催行事「大分県川柳大会」の運営実施に当たり44年の大会以来県芸術祭運営委員として連合会参加の各川柳会に呼び掛け大会を成功に導いた功績は大である。56年から大分県番傘川柳連合会会長、現在に至る。
功労賞	首藤悦爾（大分県児童文化研究会）	昭和52年から10年間にわたり、芸術祭共催行事「大分県児童文化祭」に連続出演し、地味ながら着実に活動をつづけ芸術祭の充実と発展に尽した功績は大である。
功労賞	加藤公康と大分交響楽団	昭和43年、県民オペラ第1回「フィガロの結婚」上演以来、本県芸術祭のオペラ上演に協力。また、加藤公康氏は、永年にわたり同楽団の常任指揮者として活躍。芸術祭に果した功績は大きい。
功労賞	花水豊泉（大分県美術協会）	第23回大分県美展でOG賞を受賞したのをはじめ、永年にわたり県美術協会の委員・常任委員として県美展をとおして芸術祭の充実に尽した功績は大である。昭和60年5月から62年5月まで書道部会長
功労賞	宇佐・高田地域市町村実行委員会	芸術祭開幕行事「豊の国民謡の旅」―宇佐八幡の美―の開催において果した役割は大きく、地域文化の向上発展に尽した功績は大である。
功労賞	八面山高原フェア実行委員会	郷土の文化を育成し、豊かで住みよい町づくりをめざしたユニークな文化祭を開催、内容的にも充実したものが多く地域文化の向上に寄与した。
奨励賞	二宮次蔵（日本民謡梅幸会）	県芸術祭開幕行事の出演をはじめ、各地に伝わる古い民謡発掘集録をつづけ民謡をとおして芸術祭の発展に貢献した功績は大である。
奨励賞	梅津百合子（大分県県民オペラ協会）	昭和45年以来、県民オペラの中心的会員で「吉四六昇天」の庄屋の姪役をはじめ今年の「フィガロの結婚」の伯爵夫人役など毎年芸術祭のほとんどの公演に出演しオペラをとおして芸術祭に貢献した功績は大である。
新人賞	小川昌文（大分県県民オペラ協会）	芸術祭閉幕行事「フィガロの結婚」のフィガロ役で出演し極めてすぐれた歌唱力は高く評価され今後の活躍が大いに期待できる。
特別感謝状	桂直久（大分県県民オペラ協会）	昭和43年県民オペラ協会の発足以来、20年にわたり県民オペラの演出と育成に力を尽しオペラをとおして本県の芸術文化の向上に寄与した功績は大である。

さざ波

小さな旅の小さな思い

県美協、彫刻部会長
合田 習一

出航時の喧騒がすぎてデッキの風が冷たくなった頃、澄んだ夜気の中できらめいていた別府のあかりはその輝きを失いながら波の下に消えゆき鶴見山のシルエットが大きく残った。

翌朝、高松港近くの玉藻公園でアートインテグラ'87をみた。作品は美術館では見ることができない大きなものばかり。太陽の光と爽やかな風をうけながらいろいろな彫刻や絵画で公園はあふれ、堀の水や松林など周囲の自然も加えて広場全体がひとつの作品になっていた。個々の作品は粗さが目立つが、会場には若々しいエネルギーと情熱が満ちていた。

次に倉敷へ向うべく宇高連絡船に乗船した。この航路は来春瀬戸大橋開通とともに消え去る運命である。科学や技術が進歩して合理主義や機能主義に合わないものはいとも簡単に切り捨てられてきた。そして文明の発達は人類をよりよい方向に導き、努力すれば必ず明るく豊かな未来が開けると信じてきた。物質的な意味では我々はほぼ念願を遂げた。しかし進歩や向上を至上とした近代合理主義は疑問をもたれその神話は確実に崩壊しつつある。

連休の午後の倉敷、白壁が続く大原美術館のあたりは沢山の観光客で混雑していた。道路を隔てて紅葉した街路樹の中に市立美術館があり、周囲に「まちかどの彫刻展」の入選作品がほどよく並べられていた。副題の「陽だまりの小さなオブジェたち」にぴったりの成熟した作品群であった。

新しい世紀を迎えるにあたってのポストモダンの基本理念は自然と人間の回復であり、文化の創造であると言われる。創造が人間世界の探究の中で最も大切であるとすれば、結果よりも過程を重んじ、無駄ともおもうるような永い時間と臣大なエネルギーの消費を容認されるときにのみ生まれてくるものではなかろうか。

列車はやがて別府湾沿いに進み、雨あがりの街のあかりは昨夜にも増して美しい。

加盟団体の活動

風光明媚な、我が日田市は、咸宜園教育に代表される文化的風土と、数多くの文化遺産に恵まれている。

そして現在も芸術文化活動がそれぞれのジャンルで活発に行われているが、今後は市民の自発的、積極的な参加によって地域文化の活性化と充実をさらに図らなければならない。

そこで、日田市では、これからの芸術文化発展の基礎を築くため、昭和59年10月に「日田市民文化振興基金」を設置した。

この基金の積立目標額は、5,000万円（公費2,000万円、民間募金2,000万円、有志1,000万円）で、同59年から64年までの5か年計画で積立てを行っており、その募金活動の中心が我ら日田文化連絡会となっている。

そして、この文化振興基金の運用から生ずる収益金は、次のような事業の目的を達成するために生かされることになっている。

- すぐれた芸術文化の鑑賞機会の提供
  （音楽・演劇等の公演、文化講演会、美術・工芸品等の展覧会など）
- 地域文化活動の振興
  （郷土芸能、創作文化活動、地域文化活動の奨励援助など）
- 芸術的文化財の保存
  （歴史的価値のある美術工芸品の購入、伝統能の保存など）

本年度は、運用開始の初年度として、京都大学交響楽団演奏会の開催をはじめ、日田市内の全小学校に吉四六劇団の公演など、芸術鑑賞機会の提供事業を実施した。市民文化振興基金の運用がスタートした矢先であるが、さらに、事業を拡充するため、現在、基金の額を1億円にしようという声が上がっている。

日田文化連絡会は、その目標に向けて全面的な支援をとるよう、その体制づくりを急いでいるところである。

なお、日田文化連絡会は、空閑重行会長をはじめ、30団体、会員約1,000人で市民のサークル団体が加盟している。

市民芸能祭への参加と団体ごとの独自な発表会など活動しているが、今後、市民総参加による文化芸術の振興につとめるよう願っている。

61年度　海外派遣研修帰国報告

本モノを見る楽しさ

ー中国書道史研修余録ー

牧　　泰正

二度と行けることのないと思っていた中国に、県芸術文化基金海外派遣研修者として訪れる機会に恵まれた。「中国書道史の研究」を目的に。以下は、その見聞録の一部である。

中国は、想像以上に大きかった。だから、何ごとにもあきない、こだわらない民族性がそこに育っているのかもしれない。

また、小さい時から山水画を見る度に、こんな奇想天外な景観があるものかと半信半疑で過ごしてきた私は、桂林にきてよくわかった。孟宗竹を五メートルぐらいに切り、それをいかだ組みにして舟にしているのを見て、山水画の中の釣人の舟が、一本の線で描かれている疑問が解けた思いがした。

私が何故、中国を選んだかというと、本場の中国書道を自分の目で見、そのものが存在する周辺と悠久の歴史を肌で感じたかったからである。作られた書籍で見る平面でなく、立体的に見たかったからである。

紙面が少なくて、十分な報告ができないのが残念であるが、今回の研修旅行で、本物を見る、本物に触れることの大切を改めて考えさせられた。

新シリーズ②
会員通信

わたしは、今

「子ども俳句を育てて」

佐々木均太郎

子どもの俳句「豊っ子の会」が発足して１年が経った。毎週、大分合同新聞日曜版に「豊っ子俳壇」(菊屋)を設けて優秀作を発表。さらに毎月投稿句をまとめた句集「豊っ子」を編集、県下の全小・中学校に送付している。今年の８月17日は１周年を記して第１回豊っ子俳句大会を催した。県下各地から100名を越す子ども達が集まって大人顔まけの席題に苦吟する光景を見せつけられ強い感銘を受けた。

〈大 賞 作〉

〝あさがおを見つめていたら心ゆれ〟　(別府市朝日小６年　水口 智之)

〝日曜の造船所ただ蟬の声〟　(大分市稙田中２年　安部久美子)

また、年間優秀句として**県知事賞**になった

〝大通り落葉ななめにふってくる〟　(大分市横瀬小５年　高　早奈江)

など、子どもたちの鋭敏な感覚には驚かされた。指導の先生も、句作する子どもたちは、道ばたのどんな小さな草花をも見のがさないようになったと言われている。無感動とかシラケとかいわれている現代っ子にとって俳句を作ることが大きな救いの一つになっているように思われる。

「芸館線」が開通

大分バスの「芸術会館線」が、去る10月1日、新しい路線として開通した。

この結果、ＪＲ牧駅の新設とあいまって、芸術会館利用者の足の便が、非常に良くなった。

なお、芸術会館線の区間と運行回数は、次のとおり。

■区　間　金池ターミナル(大分バス本社前)――ＪＲ大分駅前――岩田町――芸　館――牧地区――ＪＲ高城駅前――花高松。

■運行回数

平　日 { 大　分→花高松　1日20便 / 花高松→大　分　1日17便 }

日・祝日　往復11便

(写真は、開通式)

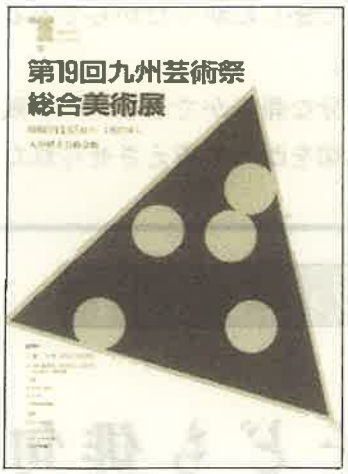
事務局だより

「文化を語る夕べ」今年も開催

昨年に続いて今年も、12月17日午後6時から大分市の商工会館ホールに約200人の人々が集い「文化を語る夕べ」を開催する。

この会は、芸術文化関係者が「お互いの組織の交流と刺激」をめざして開催するもので会に先だち、芸術祭賞、合同新聞文化賞など芸術文化関係受賞者をみんなで祝う。その後、挟間芸振会長と平松知事からそれぞれ挨拶、続いて、文芸、美術、音楽、舞踊、演劇の各部門の代表から「現状と将来展望」について5分間スピーチ。最後に今年の芸術祭開幕公演を担当した梅幸会が「豊の国音頭」などの民謡発表をし、8時まで和やかに懇談することになっている。

第19回九州芸術祭美術展



この美術展は第19回九州芸術祭のメイン行事であり、九州各県で開かれた絵画展の優秀作を一堂に集めた美術展で、本県からは、昭和57年度から61年度までのＯ・Ｇ賞作品(洋画)が出品されており高水準の展覧会として期待される。なお芸術会館所蔵品展が1月5日から31日まで開かれている。

地域文化功労者(文部大臣表彰)

片山覚自氏

戦後、県三曲協会の結成に参加。35年から県三曲協会の役員として務めるかたわら、47年から今日まで15年間、佐伯文化振興会長として、会の発展はもちろん、地域文化の向上伸展に尽力。

(県三曲協会幹事長、佐伯文化振興会会長)

大分合同新聞文化賞

挟間正年氏

53年に芸振会議の4代目会長に就任以来、芸術文化団体の自主的運営を狙いとした3億円の「県芸術文化基金」の設立に奔走。また、県芸術祭の底辺拡大に尽力、県芸術文化界に果たした功績は大きい。

(県芸術文化振興会議会長、県俳画同好会長)

大分合同新聞文化賞

岩尾光雲斎氏

13歳から竹工芸をはじめ、故佐藤竹邑斎とともに、別府の竹製品を〝竹工芸品〟に高めた。戦前、戦後を通じて、後継者育成に尽力、多くの才能を世に出した。職人気質に徹した卓抜した技と自在な発想で生み出す品格の高い作品で知られる。

(別府市美術協会会長)

発行：大分県芸術文化振興会議＊題字・野田南園＊印刷・興双林社